

## シエイクスピアと国際化

佐々木 隆

## プロローグ

日本にシエイクスピアが紹介された時代背景には、大航海時代を経て、海外から求められた国際化の一端があった。移入期から現在、そして今後の展開を時代という鏡に映してシエイクスピアを考えると、受信型から発信型の国際化へと変遷していることは明らかである。しかし、ここで考えておかなければならないことは、

... internationalization doesn't mean for Japan the abandonment of its own values and ways of life or any loss of identity.<sup>(1)</sup>

であり、“the strengthening of certain Japanese characteristics”<sup>(2)</sup> という面が当然現れて来ることになる。この考へ方は異文化理解の上で、異文化に同意し、その異文化を許容するあまり、安易に異文化を受け入れれば、「自文化の存立の意義」<sup>(3)</sup> を失うことになりかねないことを示唆している。従って、「異文化を自文化に、反対に自文化を異文化に『同化する』ことは含意されていない」<sup>(4)</sup> のである。

「国際」「国際化」「国際性」という言葉は、もともと、‘internationalization’の翻訳語であり、‘nation’ (国)

を前提していることになる。しかし、ここでは「国」と「国」について述べるつもりはない。むしろ、時代を象徴する言葉のひとつとしてとらえ、「シェイクスピアと国際化」について考察してみたい。

## 一、「日本のシェイクスピア」とは何か

「国際化」の問題を考える前に、自文化におけるシェイクスピアについて定義が必要であろう。倉橋健編『シェイクスピア辞典』（東京堂、一九七二年八月）、高橋康也他編『研究社シェイクスピア辞典』（研究社、二〇〇〇年十一月）には「日本におけるシェイクスピア」・「日本」の項目がある。

『シェイクスピア辞典』では「日本におけるシェイクスピア」の項目があり、そのほとんどが受容史的な記述である。一方、『研究社シェイクスピア辞典』では、「日本」の項目があり、高橋康也が担当し、内容は単なる受容史にとどまらず、日本におけるシェイクスピアの変容について記述されている。

外国から演出家を招くことはすでに珍しくないが、鈴木が細川俊夫作曲のオペラ『リアの物語』（歌詞は英語、歌手は多国籍）を演出してミュンヘンで初演（一九九八）したり、蛭川演出によるロイヤル・シェイクスピア劇団の『リア王』に真田広之がファールの役で出演（一九九九）するという、かつては想像もできなかったような「国際的」上演が出現しつつある。<sup>5)</sup>

など、演劇における国際文化交流にも触れている。さらに、

実際、「日本のシェイクスピア上演」は一九九六（平成八）年の国際シェイクスピア学会のセミナーのテーマとして取り上げられた。こうした研究の面においても国際化は進行し、笹山隆などの日本人編集・執筆に加わった英文論集が数冊、米の出版社から公刊されたほか、日本シェイクスピア協会創立三五周年記念英文論文集もアメリカの出版社から二〇〇〇年に刊行された。<sup>六</sup>

と、学术交流もさらに進んでいることを明らかにしている。

「日本のシェイクスピア」とは何かという最も簡単な定義は「日本（日本人）におけるシェイクスピアの翻訳・研究・上演などのシェイクスピアに関する活動、あるいは日本におけるシェイクスピア受容史に関する研究」ということになる。英語では“Shakespeare in Japan” “Japanese Shakespeare” “Japanized Shakespeare”とよく表現されている。一九九一年の第五回国際シェイクスピア学会の統一テーマにも掲げられた“Shakespeare and Cultural Traditions”が示すように、文化的諸伝統を背景に「シェイクスピアの変容」を積極的に受け入れようとするところがある。

“Shakespeare in Japan”としてすでに思い出されるのは豊田実の *Shakespeare in Japan* (Iwanami Shoten, 1940) 最近では安西徹雄・岩崎宗治等が外国人シェイクスピア学者と編集した *Shakespeare in Japan* (The Edwin Mellen Press, 1999) があげられよう。また、上演に内容を絞った南隆太他編の *Performing Shakespeare in Japan* (Cambridge University Press, 2001) もある。論文では川地美子の“Shakespeare in Japan” (『杏林大学外国語部紀要』創刊号、一九八六) などもある。“Japanese Shakespeare”というタイトルの研究書は出版されていない。

の『 笹山隆編の *Shakespeare and the Japanese Stage* (Cambridge University Press, 1998) の Part I は “Japanese Shakespeare in performance” となっている。前述の *Performing Shakespeare in Japan* には安西徹雄の “What do we mean by ‘Japanese Shakespeare’ ?” が所収されている。安西はその中で日本のシェイクスピア劇上演について

The apparent Japanesque features of their productions are nothing more than an incidental outcome, and not the goal, of their own creative activities.<sup>(17)</sup>

と述べている。日本人にとってシェイクスピア劇は伝統演劇に匹敵する何か新しいものをつくり出そうとした創造的活動の産物なのである。しかし、伝統演劇に匹敵する演劇を求めながらも、蜷川幸雄や鈴木忠志といった伝統演劇の要素を取り入れた演出が評価されているのは、偶然の産物と片付けられるのだろうか。Oscar James Campbell 他編の *The Reader's Encyclopedia of Shakespeare* (1966) には “Japan” の項目がある。その下は、日本のシェイクスピア劇上演史を辿りながら

The “Japanese” Shakespeare was thus very well established in the commercial theatre at a time when the “English” Shakespeare there was, understandably a rarity.<sup>(18)</sup>

の記述がある。また、安西徹雄等編の *Shakespeare in Japan* の書評となっている Suematsu Michiko の “Japanese

Shakespeare” (*The Renaissance Bulletin*. 26, 1999)では一九九一年の第五回国際シェイクスピア学会以来の傾向を

a growing interest in cross-cultural studies and reception studies encourage the Japanese to demonstrate what their scholarship has achieved.<sup>(4)</sup>

と評している。石原孝哉の“Shakespeare as Japanese Culture”（『駒澤大学外国語部研究紀要』第二八号、一九九九）には“Japanese Shakespeare”の項目が立てられている。“Japanized Shakespeare”という言葉は書名としては登場していないが、英語論文の中で“Japanization”などの表現や日本の伝統芸能の上演から“Kyogenising Shakespeare”のような表現も見受けられる。“Japanized Shakespeare”は上演に関する記述に多く用いられているようだ。本来、「日本のシェイクスピア」は「日本（日本人）におけるシェイクスピアの翻訳・研究・上演などのシェイクスピアに関する活動、あるいは日本におけるシェイクスピア受容史に関する研究」と言った広い意味で考えられていたはずである。しかし、第五回国際シェイクスピア学会を境に「日本のシェイクスピア」は「日本独自のシェイクスピア」を求める方向性を強く意識するようになり、この方向性はシェイクスピア劇上演に特に現れたようだ。

この十年間における「日本のシェイクスピア」の関心事は“a growing interest in cross-cultural studies”<sup>(10)</sup>であり、“Shakespeare as Japanese Culture”<sup>(11)</sup>に向けられてといっても過言ではないだろう。一方的な異文化理解から自文化の見直しが加わったことで、日本人としてのアイデンティティがあらためて再認識されることになり、「日本のシェイクスピア」に深みが増すことになったのだ。

## 二、異文化理解としてのシェイクスピア

演劇改良会が考えていた演劇改良運動は、歌舞伎などの日本の伝統演劇の西欧化は失敗に終わった。しかし、坪内が考えた脚本の改良を第一とした演劇改良の考え方は、文芸協会の設立やシェイクスピア劇全訳へのスターラインとなった。坪内は西洋のドラマツルギーで歌舞伎を変容させようとしていたのではない。異文化を異文化として受け入れ、日本的なものに変化させようとしたのである。坪内にとって異文化の代名詞がシェイクスピアであった。坪内はさらにイプセンにも取り組み、シェイクスピアとはまた違ったドラマツルギーを理解しようとしていたことも見逃せない姿勢である。

日本のシェイクスピア受容の第一人者であり、演劇改良運動で脚本の重要性を主張し、文芸協会を設立、『沙翁全集』の翻訳を果たした坪内逍遙は、「日本に沙翁劇を興さんとする理由」の中で、「沙翁劇を日本人の心で別に解釈を試みるということは世界文芸上の一つの貢献であると思ふ」と述べ、さらに「国訳沙翁劇の上演は可能か、不可能か？」の中で

われわれはわれわれの立場から、われわれの解釈、われわれの趣味に依って、われわれみづからの為の演出を試みるがよい。日本人の立場から。これは（文芸協会当時からの）私自身のモットーである。

と、述べた。この坪内のモットーに日本人がシェイクスピアに取り組む原点を見いだすことができる。明治時代

は「日本の近代化」の時代であり、坪内はシェイクスピアを通して日本演劇の近代化に力を注いだのである。<sup>(二四)</sup> 坪内の信念は一九三〇年の日本シェイクスピア協会の設立につながることは言うまでもない。日本シェイクスピア協会発会式で会長の市河三喜は式辞の中で次のように述べている。

外国にむかつては、日本人の研究を世界に紹介いたしましたして、以て所謂国際的智能協力の実を挙げようと致したのであります。<sup>(二五)</sup>

さらに式辞の後半でも注目しておきたい個所がある。

我々はそれを研究して個人としては我々の生活を充実せしめ我々の人間性を豊富ならしめ、国民としてはこの文豪を通じて英国人、更には進んでは一般西洋人の思想の根底を成するものを研究し理解し、同時に又日本人の Shakespeare 研究即ち我々如何に Shakespeare を解釈するか、日本人の立場として Shakespeare の書いたものをどう判断しどう批評し得るかを世界に示して日本人の思想的特徴をひろく外国に明らかにし、以て国際的理解を助け、且東西の智的協力に貢献いたしたいと考へて居るのであります。<sup>(二六)</sup>

と、市河会長の言葉からは、坪内と同じ精神、さらに発信型の研究への原点をも見ることができるといえる。つまり、日本シェイクスピア協会の設立趣旨には、シェイクスピアによる学术交流、国際文化交流を示唆するものがある。明治期、特に演劇改良運動においては受信型の文化交流であったことは言うまでもない。川上音二郎・貞奴によ

る海外公演などもあつたが、当時はまさに

In trying to define "internationalization", we must first dispose of one serious misconception. Many Japanese think it means the Westernization of Japanese life styles and values. (14)

といった様相である。坪内の「日本人は日本人の立場」からシェイクスピアを鑑賞し、理解し、上演するという信念には、第一次日本シェイクスピア協会設立により「国際的智能協力」、第二次日本シェイクスピア協会設立により「文化交流」<sup>(15)</sup>が加わつた。三つの信念は三身一体となり、第五回国際シェイクスピア学会の統一テーマ“Shakespeare and Cultural Traditions”として実を結んだのである。

### 三、英文によるシェイクスピア研究

明治以来、日本は西欧のシェイクスピア研究を積極的に受け入れてきた。これは受信型の研究と言ってよい。一九三〇年の日本シェイクスピア協会の設立により、国際化の下地がすでにできていたのである。発会式で市河三喜会長は式辞の中で

これには少なくとも年に数回、会の仕事及び日本に於ける Shakespeare 研究の記録とし、和英両文を以て発行しなければならぬと思ひます。<sup>(16)</sup>



と述べている。一九三一年の『日本シェイクスピア協会会報』(第二号)の巻頭論文は、豊田実の英語論文「Shakespeare in Japan: A Brief Historical Survey」であった。そして、九年後にはこれをさらに広げ、充実した姿となり、*Shakespeare in Japan* (Iwanami Shoten, 1940)となったのである。これは「日本におけるシェイクスピア」を海外へ紹介することが大きな目的であり、何よりも英文による本格的な研究書の元祖と言ってもよい。このような英文のシェイクスピア研究が発表されたことによって、国際コミュニケーションの観点から見ても、国際語英語の考え方は無視できないものとなって来た。一九六一年に再建された日本シェイクスピア協会は、翌年に英文による学会誌 *Shakespeare Studies* を創刊し、一九七一年には第一回国際シェイクスピア学会が開催され、世界の流れは確実に国際的な研究へと進んだ。上智大学に本部を置くルネッサンス研究所は一九七四年に *The Renaissance Bulletin* を創刊し、成城大学の大山俊一を中心にして *Shakespeare Translation* (Tokyo: Yushodo) も創刊され、第一号から *Shakespeare Worldwide* と改名されたが、現在休刊中である。情報誌としては、第五回国際シェイクスピア学会を機会に一九九一年に駒沢大学シェイクスピア・インスティテュートによって創刊された *Shakespeare News from Japan* は年報の形式で、英文でシェイクスピア書誌と上演状況を中心にして情報を海外へ提供している。

*Shakespeare News from Japan* was published for the purpose of introducing "Shakespeare in Japan" into foreign countries. It seems that Shakespeare studies in Japan are not aggressively directed at foreign countries. The fact is that there are a few books concerning the history of Shakespeare studies in Japan written in English.<sup>(10)</sup>

らの情報はアメリカの World Shakespeare Bibliography を経て *Shakespeare Quarterly* (Texas: The Folger Shakespeare Library) の毎年第五号に掲載されている。

英文によるシェイクスピア研究書は、戦前の受容史をまとめた豊田実の *Shakespeare in Japan* (1940) があるが、戦後となると、仁木久恵の *Shakespeare Translation in Japanese Culture* (Tokyo: Kenseisha, 1984)、『喜捨哲雄他編の *Shakespeare and Cultural Traditions* (Newark: University of Delaware Press, 1994)、『川地美千の *Shakespeare and Cultural Exchange* (Tokyo: Seibido, 1995)、『上野美子編の『Hamlet and Japan (New York: AMS Press, 1995)、『藤田美とハコナード・プロント編の *Shakespeare East and West* (England: Japan Library, 1996)、『舟山隆編の *Shakespeare and the Japanese Stage* (Cambridge: Cambridge University Press, 1998)、『川地美子編の *Japanese Studies in Shakespeare and His Contemporaries* (Newark: University of Delaware Press, 1998)、『安西徹雄編の *Shakespeare in Japan* (New York: The Edwin Mellen Press, 1999)、『南隆太他編の *Performing Shakespeare in Japan* (Cambridge: Cambridge University Press, 2001) の九冊に注目しておきたい。仁木久恵の *Shakespeare Translation in Japanese Culture* (1984) は第五回国際シェイクスピア学会以前に発表された戦後を代表する発信型のシェイクスピア研究である。仁木久恵は“Introduction”の中で翻訳が研究の分野として日本では不十分であることを指摘している。

It is obvious that further research, on both the process and the product of Shakespeare translation from empirical and non-empirical points of view, is needed to establish the discipline of Shakespeare translation in Japan.<sup>(11)</sup>

と、シェイクスピア翻訳が研究分野として必要であることを提言している。喜志哲雄他編の *Shakespeare and Cultural Traditions* (1994) は一九九一年の第五回国際シェイクスピア学会の大会をまとめたものである。タイトルは統一テーマがその主旨採用されている。川地美子の *Shakespeare and Cultural Exchange* (1995) は *Shakespeare Translation* (*Shakespeare Worldwide*) での編集経験が十分に發揮され、日本における翻訳や翻案の問題を中心にまとめられたものである。なかでも NINAGAWA シェイクスピアに代表される上演や黒澤シェイクスピアまで扱ってしまつたのが大きな特徴である。上野美子編の *'Hamlet' and Japan* (1995) はジョン・レニングが general editor を務める *The Hamlet Collection* の第二集として出版された。編者の上野美子は "Introduction" の中で

In 1990 no fewer than seven-teen different productions of Hamlet or plays based on it were staged in Tokyo. In 1991 the Fifth World Shakespeare Congress was held in Tokyo with the theme, Shakespeare and Cultural Traditions'. In less than one century, Shakespeare seems to have become "our Shakespeare and Hamlet seems to have become a part of Japanese cultural tradition. As Toshio Kawatake maintains in his informative book, *Nihon no Hamuretto* (*Hamlet in Japan*), the history of importing Hamlet is nothing but an epitome of the modernization of Japan. Although there are various Japanese studies and productions of Hamlet, not many are known outside of Japan. Quite contrary to the present economic situation, our imports have greatly exceeded our exports in regard to Shakespeare. This volume is an attempt to adjust such an imbalance, even if on a small scale.

と、日本からの発信型の研究の必要性を説いている。藤田美とレオナード・プロンコ編の *Shakespeare East and*

*West* (1996) は一九九一年の第五回国際シェイクスピア学会で藤田実が司会を務めた “Seminar 5: Acting and Language in Shakespeare and the Eastern Theater” の成果をまとめたものである。

This collection of papers on Shakespeare viewed from the perspective of the Oriental theater traditions is entitled *Shakespeare: East and West* after the name of Professor Pronko's book which worked as a strong motive to the organization of the aforesaid seminar. The contributors of the essays are from the members of the seminar chaired by me. Participants were encouraged to discuss any aspect that had to do with the close connection between language and performance in Shakespeare's plays and Oriental theater. <sup>(110)</sup>

歌舞伎・能を中心とした日本の伝統芸能や劇場構造からみた比較研究が所収されている。シェイクスピアと日本演劇を論じた笹山隆他編の *Shakespeare and the Japanese Stage* (1998) には次のようにある。

The book is a collaboration between leading Shakespeare scholars from Japan and the West. The first part deals with key twentieth-century moments in the assimilation of Shakespeare, including the work of world famous Japanese directors such as Ninagawa, Suzuki and Noda; the second part considers parallels and differences between Japanese and Western theatre over a longer timespan, focusing on the relationship of Shakespeare to traditional Japanese. Noh, Kabuki, Bunraku and Kyogen. <sup>(111)</sup>

川地美子編の *Japanese Studies in Shakespeare and His Contemporaries* (1998) は、日本人のシェイクスピア学者がシェイクスピアと彼の同時代人の劇作家について書いたものを集めた英語論文集で、海外の出版社から出版された例である。安西徹雄他編の *Shakespeare in Japan* (1999) は以下のような趣旨で出版された。

Outside the English-speaking world, outside the European world, outside the orbit familiar to the dramatist himself, it is astonishing how wholeheartedly the Japanese have taken William Shakespeare to themselves. His work is not just a matter for academic research among scholars to be presented at learned conferences; but his plays, by way of translation and production over many generations, from Japan's opening to the West in the mid-nineteenth century till today, have become familiar to innumerable Japanese of all ages.<sup>(1)(英)</sup>

南隆太他編の *Performing Shakespeare in Japan* (2001) では、'Preface' の中で高橋康也は

One of the after-effects was a seminar on "Japanese Shakespeare Productions: Problems of Stylization and Localization" held at the Sixth World Shakespeare Congress (Los Angeles 1996).<sup>(1)(英)</sup>

と、本書が第六回国際シェイクスピア学会の成果であることを紹介している。セミナーとして「日本のシェイクスピア上演」が取り上げられたこと自体、大きな学術交流と言える。また、二〇〇〇年には日本シェイクスピア協会創立三五周年を記念して、高橋康也編の *Hot Questrists After the English Renaissance* (New York: AMS Press)

という英文論文集も出版されたことも付け加えておきたい。これらの発信型の研究は、客観的情報の提供、「日本のシェイクスピア受容」の発信、海外のシェイクスピア学者との研究成果の発表など、学术交流も急速に進んでいることを明らかにしている。日本では一九九一年の第五回国際シェイクスピア学会以後、明確に「国際化」を意識した英文によるシェイクスピア研究が発表されているのだ。

## エピソード

「日本のシェイクスピア」は「シェイクスピアと文化的諸伝統」が統一テーマとなった第五回国際シェイクスピア学会以後、日本人もようやく「日本のシェイクスピア」に本格的に眼をむけざるを得なくなり、特にこの十年間、「日本のシェイクスピア」が話題に上ることが多くなった。この傾向は上演や出版物を通して客観的に見ることが出来る。さらに大きな特徴は、英文による海外への発信型の研究が多くなったということであろう。異文化理解では、自文化を意識し、アイデンティティを持っていることが何よりも重要である。従って、上演、研究と「日本のシェイクスピア」の国際化の時代を迎え、今後は、学術研究、演劇による交流などがますますさかんになるだろう。しかし、西洋演劇は西洋演劇として、日本演劇は日本演劇として、「自文化の存立の意義」こそが重要となつて来るのだ。

## 註

- (一) Reischauer, Edwin O., translated by Masao Kunihiro. *The Meaning of Internationalization*. (Tokyo: Charles E. Tuttle Company, 1988), p. 36.
- (二) Ibid., p. 36.
- (三) 飛田就一「異文化理解の構造」(寛文生・飛田就一編『国際化と異文化理解』法律文化社、一九九〇年一月)、p. 21.
- (四) Ibid., p. 23.
- (五) 高橋康也「日本」(高橋康也他編『研究社シェイクスピア辞典』研究社、二〇〇〇年十一月)、pp. 502-503.
- (六) Ibid., p. 503.
- (七) Anzai, Tetsuo. "What do we mean by 'Japanese Shakespeare'?" (Minami, Ryuta, Carruthers, Ian, and John Gillies, editors. *Performing Shakespeare in Japan*. Cambridge: Cambridge University Press, 2001), p. 20.
- (八) Campbell, Oscar James and E. Q. Quinn, editors. *The Reader's Encyclopedia of Shakespeare*. (Tokyo: Toppan Company, 1960), p. 298.
- (九) Suematsu, Michiko. "Japanese Shakespeare". (*The Renaissance Bulletin* 26, 1999), p. 36.
- (一〇) Ibid., p. 36.
- (一一) Ishihara, Kosai. "Shakespeare as Japanese Culture". (『駒澤大学外国語部研究紀要』第二八号、一九九九年三月)、pp. 1-21.
- (一二) 逍遙協会編『逍遙選集』(別冊第12、第一書房、一九七七年十月)、p. 639.
- (一三) 逍遙協会編『逍遙選集』(別冊第5、第一書房、一九七八年二月)、p. 319.
- (一四) パウエル/永井大輔訳「二つの演劇化が交わるとき——明治期の日本と英国」(細谷千博、ニッシュ監修/都築忠七、ダニエルズ、草光俊雄編『日英交流史 1600-2000』5 社会・文化、東京大学出版会、二〇〇一年八月)、pp. 363-380.
- (一五) 『日本シェイクスピア協会会報』(第一号、日本シェイクスピア協会、一九三〇年十月)、p. 2.
- (一六) Ibid., p. 5.
- (一七) *The Meaning of Internationalization*, p. 14.
- (一八) 日本シェイクスピア協会編『日本シェイクスピア協会三十年小史』(日本シェイクスピア協会、一九九三年四月)、pp.

3-4'

- (一六) Ibid., p. 2.
- (一〇) Sasaki, Takashi, chief-in-editor. *Shakespeare News from Japan*. Vol. 1. (Tokyo: The Komazawa University Shakespeare Institute, 1991), p. 61.
- (三三) Niki, Hisae. *Shakespeare Translation in Japanese Culture* (Tokyo: Kenseisha, 1984), p. 2.
- (三二) Ueno, Yoshiko, editor. 'Hamlet' and Japan (New York: AMS Press, 1995), p. IX.
- (三三) Fujita, Minoru and Leonard Pronko, editors. *Shakespeare East and West* (England: Japan Library, 1996), p. vii.
- (三四) Sasayama, Takashi, et al, editors. *Shakespeare and Japanese Stage* (Cambridge: Cambridge University Press, 1998), p. 27.
- (三五) Anzai, Tetsuo, et al, editors. *Shakespeare in Japan* (New York: The Edwin Mellen Press, 1999), p. 2.
- (三六) Minami, Ryuta, et al, editors. *Performing Shakespeare in Japan* (Cambridge: Cambridge University Press, 2001).
- (三七) 飛田就一「異文化理解の構造」, p. 21.

(武蔵野短期大学国際教養学科助教授)